味が良く、走りの良い大回り用のスキーを作れということで、スリーサイズを調整したトップが広く、センターを絞ったスキーを作り、選手に履いてもらいましたが、最初は皆さん履けませんでした。

それを調整しまして、平成８年頃からカービングのようなスキーを出してきました。この当時はまだ、カービングなんて言葉はございません。

カービングと言う言葉が一般的になって来たのは、平成９年～10年頃です。

ですから、カービングスキーの生産に対しましても、走りだったと思っております。

改良改善を加える、或いは新しい繊維を用いるというようなことを盛んにやってきました。現代になりますと、ケブラーやアルミナや新しい物は、使いこなすのに難しさがありますから現在は製作しておりません。

もう一つ、皆さんに物作りの中でお話ししておかなければならないのは、平成15年に「よーいどん」という皆さんに縁のないスキーですが、初心者用のスキーで「一日でパラレルターンができる」スキーを作ろうと始めたスキーがございます。

佐藤久哉君を使って、随分素人の女性をスキー場に連れて行きまして、スキー靴を履いて雪の上を歩けないものですから、佐藤君がおんぶしてゲレンデまで行って滑ってもらったという話もございました。

北海道内でも、初心者導入用としてスキー場で使っていただいています。「一日でパラレルまで」ということで、看板に偽りのない性能を持たせており、長野県内でも修学旅行の生徒たちに盛んに使われております。

100年という中で何を感じるかと言いますと、100年持ったということは多くの皆さんに、お客さんに支えられたという、その一言に尽きるわけでございます。

良い品物を作り続けるためには、良い材料と確かな技術、もう一つ、一番重要なのはスキーの芯材に何を使っているのか分かりませんので、良心的な仕事をしなくてはならない。

それに尽きると思っております。

駆け足で100年の物づくりに触れて参りましたが、この後、私共がどんな考え方で会社運営、物づくりをしているか、そしてスキーを売っているか、映像を使ってご説明申し上げたいと思います。

私共は、スキーの芯材には材木に勝る芯材は無いというのが信念でございます。

一時、脱木材と盛んに言われた時期もありましたが、現在はヨーロッパから入ってくるスキーを見ますと、上級モデル・競技用スキーにしても殆んどが芯材は木材です。

中級以下のスキーにプラスチックを組み合わせたチャンネル状のものとか、初心者向けの低価格になると、周りを囲んで中にウレタンを注入するインジェクション製法のスキーがあるようです。

滑るスキーの芯材は木材という優秀性は誰もが認めるところであり、考え方が間違っていなかったと思っている次第でございます。

私共の会社は、長野駅新幹線東口から歩いて15